

えどがわ伝統工芸品

磨き抜かれた(かたち)と(色)。
作品本来の持つ美しさを身近にご覧ください。

暮らしにワザありテクニック!

さりげない演出で工芸品を
日々の暮らしにも取り入れてみませんか!

結婚・喪儀デザインのマスターピース

時を越えて残る
伝統工芸品の(架紙)コレクション。

素敵な
伝統工芸品プレゼント

伝統工芸 Cafe
アルティザンにて
500円以上ご利用の
お客様より抽選にて
工芸品をプレゼント

<ギャラリーイベント> 無料

● コマの絵づけに挑戦しよう。

4/29(金) 10:00-12:00 / 午後2時-

● 伝統工芸ファッションショー

5/29(日) 11:00-午後1時-
2回目 午後2時-

会場: しのだぎ文化プラザ3F 企画展示室

ギャラリーイベントは
申込みが必要です。

2011
3.19 (土)
2011
6.12 (日)
入場無料

主催: 江戸川区・しのだぎ文化プラザ指定管理運営機構 S.A.パブリックサービス

しのだぎ
文化
文化プラザ

しのだぎ文化プラザ 3F 企画展示ギャラリー

江戸川区雑司町 7-20-19 3F TEL.03-3676-9071 (代)
都営新宿線・雑司駅西口直結 開館時間 / 9:00 ~ 21:30

www.shinnozaki-bunkaplaza.com

しのだぎ文化プラザ





〈形〉にしたいもの。
 それは、えどがわの心。

器を（見る目）、（選びか）、
 名品とはどういうものだろう。

以前、私がつくった器をお褒めいただいたのはお喜
 儀が「手に持った感じがそれぞれのお家で違うのですわ、
 というような感想を述べられたことがあります。

この言葉には陶器を見る目・選びか、ということにつ
 いて、天狗なヒントがこもっていると思うのです。器を
 つくる職人の手と、その器に向き合う暮らしの手は、無
 言のうちに語り合っているのです。だから、まだ言葉
 だけで自分の手に持っていることをお褒めします。まだ
 未完成のような動作や佇まい（手の触れ）を確かめる
 ことが大事です。手にしっくりとれること、持った
 時の感触も大事です。

また器のみやコーヒー
 スープなど、口をつけて
 使うものは、お褒めさ
 んにこころをこめて研
 磨をつけて試してみるの
 もいいでしょう。



ご自身の（手にあはれ）、（使いやすさ）、（触かしやす
 さ）など、そんな日常使い、何気ない場面で器が心地よ
 くなるコトが、名品というもの。それは「自分」で選び、決
 めるものなのかもしれません。



ふるさと・小岩の土。
 こだわりは《甲和焼》にあり。

こだわりは土にあります。生まれ育った小岩の土です。
 赤土で陶器の土を多く使ったのは今から40年ほど前。
 当時お茶碗の土が足りなくなり、材料を入りする方から買
 らなかつた。ただ、小岩の地味な土は熱い器になるとい
 うことは知っていたので、自分の家の器を焼きました。
 それがはじめです。



今でもそうですが、赤の土は陶器には向いていない、
 崩れやすく、熱い気も無い。器を作っても器そのもの
 の赤みだけで完成してしまう。だから、赤の土で作れ
 る陶器の形はとて驚かされたものになってしまう。試行
 錯誤もいろいろ繰り返しました。やがて、熱い器はばり
 を押すために日本酒を器に注ぎこみ、それを1年以上
 寝かせる技法に行きつく。さらに、器づくりに専ら
 を繰り返すことで《甲和焼》の完成に達しました。えど
 がわ・小岩の土の陶器です。



（好奇心）と（偶然）と。
 新たな技術との出会い。

《甲和焼》と《甲和焼》、いずれも私が生み出した陶
 器です。《甲和焼》は赤土の土で成形した器を器で焼
 く際に、器の隅りにハマダマ・アサリ・シロエなどの目
 肌をまわって焼いたものです。焼土と器の成分が化学反
 応をおこして見る目にも美しい模様が見えます。《甲和
 焼》は青に仕上げがあり、紅色の器とが特徴的な器です。

じつは、新しい材料には「こだわり」だけでなく、
 “好奇心”や“偶然”も、運命のさそひ手になっていま
 いることがあります。ある陶器家が陶器で器にヤングを
 まわって焼いたという話を聞いたことがありました。且
 け陶器焼成機を調べてみるかどうかという“好奇心”
 から器を焼いたのが《甲和焼》です。

こんなこともありました。器を焼く作業中に砂場で泥
 の水が流れてしまったことがある。目をあけてみると半
 は焼がもみこみで、これは失敗だと諦めました。しか
 し、そこには半焼の器と半焼の器が生まれていた。こ
 れがいまある《甲和焼》との出会いでした。研究を深め
 改良を加えたとして、今でも焼きの途中でコンセントを抜
 くという役（？）を作業の手順にしています。



陶芸家
 林 信弘
 Ritsuko Hayashi



＜プロフィール＞

1944年生。福岡県（小倉）東区東山町出身。東北
 大学の西に美術で学んだ。70年制作家デビュー。2017
 年東京に移住。東京で暮らしながら、各地の窯元で
 作品制作。1人暮らしと共同生活の両方を体験。自身の
 制作を器として作り出す。焼土と器の成分の相性、其の
 他について調べている。焼土したものだけでなく、赤土
 一色焼の器も作っている。
 以後、器に自分の意志をこめて、器の個性は多く刻みこみ、
 器も器に個性で陶器の器に導く。1990年日本陶芸家協会
 江戸川支部に支部長に就任。研究会、研究会の代表。

染色型紙

ゆかた、手ぬぐい、半纏（はんまわ）などの染物用の型紙です。型紙に使う紙は「澁紙」と言って、手すき和紙を稀液で貼り合わせて作られた丈夫な紙です。注文の図案のコピーをとり、型紙用紙に貼って、切り抜いていきます。染物を扱う問屋からの注文で型紙を製作します。

江戸ゆかた

ゆかたは、江戸・寛政年間頃より流行し、弘化年間頃大きく開花したといわれています。染色は江戸時代に藍染技術が発達して、紺と白の美しい柄が出来ました。明治時代になると、柄もますます多様になり疑問着としても利用されて、一世を風靡するようになります。江戸時代の型紙を使い、江戸川区で染めていることから「江戸ゆかた」と称しています。

陶芸

陶芸とは、粘土を練り、手やろくろを使って、陶磁器（お皿、つば、茶碗など）の形を削り、高温の窯で焼いて仕上げる技術のことです。一般には「焼き物」と呼ばれ、大きく陶器と磁器に分かれます。陶器と磁器の一番の大きな違いは材料の違いです。陶器は粘土。磁器は石の粉に粘土を混ぜ合わせたものをそれぞれ原料とします。

江戸風鈴

ガラス製の風鈴の起源は、西暦1730年頃といわれています。長崎のガラス職人がガラスを見せ物として大阪や京都を興行して歩き、その後、江戸にまで伝えられました。今でも変わらない製法で作られています。「江戸風鈴」の名は、昭和40年頃に藤原儀治が先代藤原又平から受け継いだガラス風鈴を、昔の東京（江戸）で、江戸時代から作られていたことから、命名しました。

組紐

江戸の組紐の起源は江戸時代以前に遡り、江戸幕府の開設によって武器に必要な組紐の生産が盛んになったといわれています。江戸初期の組紐は下級武士によって伝えられましたが、中期以降は一般庶民に普及し実用的なものから次第に華美、精巧なもの作られるようになりました。今日では江戸の伝統を保ちながら手作りされ、その渋い味わいと気品の高さの特徴として製作を続けています。

手描き友禅

日本のもっとも代表的な布に模様を染める技法です。友禅染めの名前は、創始者である江戸時代の扇絵師「宮崎友禅斎」に由来します。一つの布の面に、ほかでは見られないほど多様な色彩を使い、「友禅模様」と呼ばれる曲線的で簡略化された動植物、器物、風景などの文様を描き出すのが特徴です。

型小紋

型小紋はもともと武士の袴の地紋として発達してきました。各藩がそれぞれ独自の小紋柄を工夫し、他藩との差別化を図ったのです。江戸後期には型彫り技術の発達により、そのデザインの精緻さが増してきました。やがて町人たちの着物や羽織に型小紋が取り入れられるようになり、それに伴って、デザインの種類が豊富になりました。当初は男性の略服でしたが、次第に女性の着物へと浸透していきました。

江戸切子

天保5（1834）年、江戸・大伝馬町のガラス器具屋「加賀屋久兵衛」が、金剛砂を用いてガラスの表面に彫刻をする工夫をしたと伝えられています。江戸時代からの職人たちによって作られたので「江戸切子」の名称が生まれました。

※1 金剛砂とは宝刀の一種であるざくろの粉末を以したものを



江戸ゆかた
 語り

高橋 常兵衛
 高橋 栄一

＜プロフィール＞

職名 常兵衛

1941年、山口県下関市に生まれる。1961年、東京芸術大学で染織を専攻し卒業。1963年、高橋栄一と結婚し、高橋常兵衛と改名。1964年、高橋栄一と共同で江戸ゆかたの工房「高橋常兵衛」を設立。1970年、高橋栄一と共同で江戸ゆかたの工房「高橋常兵衛」を設立。1975年、高橋栄一と共同で江戸ゆかたの工房「高橋常兵衛」を設立。

職名 栄一

1947年、山口県下関市に生まれる。1967年、東京芸術大学で染織を専攻し卒業。1969年、高橋常兵衛と結婚し、高橋栄一と改名。1970年、高橋常兵衛と共同で江戸ゆかたの工房「高橋常兵衛」を設立。1975年、高橋常兵衛と共同で江戸ゆかたの工房「高橋常兵衛」を設立。

無尽なる「カタチ」の連鎖。
 時をこえてのさらなる独創。

〈柄〉とは職人の気質が映える
 粋なもの。

「もの」というのは、しっかりと仕上がってある作品。だから柄の美観に入る前に生活の面をみましょうか。うちのゆかたはご家庭の高級感でも使えるようにこしらえてあります。生地にも工夫がある。だから色も落ちない丈夫で耐えないんです。

さて、ここからゆかたの主要なデザインの話。ゆかたの〈柄〉ですね。これはもう、承式ではあまり目にしないようなものをお探しならば一度ご覧になっていただきたいです。私どもが江戸ゆかたを世界的に展開するにあたっては、お客様も楽しんでいただけるように、いろいろな柄をご用意しています。私どもが江戸ゆかたを世界的に展開するにあたっては、お客様も楽しんでいただけるように、いろいろな柄をご用意しています。私どもが江戸ゆかたを世界的に展開するにあたっては、お客様も楽しんでいただけるように、いろいろな柄をご用意しています。



高橋常兵衛（左）と高橋栄一（右）が共同で江戸ゆかたの工房「高橋常兵衛」を設立。

染色型紙の組合せから広がる
 イマジネーションの世界。

ただ私どもがそれにひと工夫するのは、そのまま使う人じゃなくて染織と柄紙、染料と紙料。違う時代のものどうしを現代の感覚に合うようにいくつも組み合わせで使ってる。だからどこかで見たような柄にはなってないはずですよ。

これは、昔の柄はともち職人があるんですけど、それ一般の型紙だけで染め上げるだけだと少し古びて見えてしまうんです。現代人の感覚で手に取るため、だから、柄紙かの型紙を組み合わせて使う。染料の世界をこねさないと、染料の世界がさらに広がります。たとえば従来の江戸柄だけが使われていた時代に、水の染めを聞いた柄を組み合わせて使う。こうすることでより奥行きも深まるわけですね。それぞれの型紙が作られた時代は違っても、現代ならばこそ、それらを組み合わせることが出来る。これが時代の進化とアレンジ。これこそ私どもの仕事。（デザインを企画す）ということになるんです。



高橋常兵衛（左）と高橋栄一（右）が共同で江戸ゆかたの工房「高橋常兵衛」を設立。



高橋常兵衛（左）と高橋栄一（右）が共同で江戸ゆかたの工房「高橋常兵衛」を設立。



高橋常兵衛（左）と高橋栄一（右）が共同で江戸ゆかたの工房「高橋常兵衛」を設立。



高橋常兵衛（左）と高橋栄一（右）が共同で江戸ゆかたの工房「高橋常兵衛」を設立。

酒祝、ユーモア、切なる願い。
 着物に染まる江戸庶民のエスプリ。

じつは柄というものは〈思い〉や〈意味〉が込められているんですよ。（帯）の柄には古今の〈願い〉、〈縁起〉ならば「好きな物事に勝んでいきたい」という願い、柄の意味を氣にされるのは、どちらかというと男性の好意なんです。女性のお着物は、若くかいて見ると柄とか、スマートに見える柄とか、そういう帯の方も大事ですよ。（帯）



江戸ゆかたの工房「高橋常兵衛」が共同で江戸ゆかたの工房「高橋常兵衛」を設立。

こうした柄ですが、昔の着物、江戸時代には酒祝を喜ばせたいものがあったりしますよ。たとえば、魚を食べる（ウツメリ）。この魚を着物に入れて「大層な人に喜ばせたい（ウツメリ）」と願う。（帯）の柄は人からハセエを待ってますから、実際に喜ばせられても怪しまれる。なんていう意味がある。お着物の柄紙を裏面に染めると、ちょっとした西洋の古典的な柄が透けて見えます。すると「あの人はお着物だよ」ということになり、「おの海のぼり」。これはお祝いしたいという願い。昔も今も人の気持ちは同じですよ（帯）。そんなふうにいろいろあるんです。だから、昔の柄を身にまよって、当時の人のエスプリを味わうというののも一つの楽しみですよ。私どもは、こういう帯の人がお着物に染めたいものを現代に染めたいんです。そして、これからの時代にもぜひ伝えていきたいと思っています。

染色型紙コレクション
 オープンギャラリーにて大公開!!

高橋常兵衛さんがこれまで集めた型紙の数はおよそ1万枚！江戸時代から現代に至るまでの時代ごとの流行を垣間見ることが出来ます。特に時代の流行で作られた型紙に同じモチーフの柄が描かれていることが多ければ、それだけ人気があったんだということになります。江戸時代のものは、それぞれに話の裏面が盛り込まれ、話の数は30枚以上もあったということなども判ります。是非人にとって、その時代のいろいろな意見があるのもこれらの型紙です。今回、型紙コレクションの一部をオープンギャラリーにて公開しています。ぜひご覧になってください。



佐原 隆裕
佐原 隆寛

江戸風物
襦原 儀治
襦原 裕

灰かなやすらぎ、清涼感。
澄み渡る「和」の余韻。

忘れていた何かを
いつも思い出させてくれる音。

職人 二代目 篠原 儀治
昔はね、身の回りや町中に今よりもいろんな音が聴こえてた。今の職、太鼓の響き、神社の鐘、季節の長巻の鳴き声とかね。何やと聞くと、そして生き物たちが「ここに居ますよ」と語りかけてくれていた。

それが今じゃあ今の音の音も「うるさく」という所まででしょ。さびしいですね。私がつくるとは違いますが、職人だけの道具でしたから、音が響くことで「悪いもの」が近づかない、そんな意味もあったんです。もちろん人間性はそのようなことを使うことにはなくてもいいんです。

昔っていうのは文化なんです。日本という国も、みんな今よりちょっといろんな音に囲まれて暮らしてた。そんな音からの音も今の音にも響かしてくるのが風物ね。それがいいんですよ。風物のある暮らしっていうのは、



襦原 裕
1981年生まれ。2013年より「和」の文化を伝えるために、東京府内各地の神社・寺・学校・イベントなどで「和」の文化を伝える活動を行っています。現在は、江戸時代の工芸品をテーマにしたアートプロジェクト「和」の文化を伝えるために、東京府内各地の神社・寺・学校・イベントなどで「和」の文化を伝える活動を行っています。

ガラス風物の起源はね、江戸時代、西暦1733年頃まで遡ります。古物のガラス職人が跡をしながら江戸に立ち育った器にその技術を伝えたんです。そんなガラスづくりを学んだ職人のところに、のちに染入りしたのが私の祖父、篠原儀治の初代です。以来、この家系、私が二代目、孫が三代目という具合に伝統の技を守りながら、このんがわの地で江戸風物をつくり続けているわけです。



ガラス風物の起源はね、江戸時代、西暦1733年頃まで遡ります。古物のガラス職人が跡をしながら江戸に立ち育った器にその技術を伝えたんです。そんなガラスづくりを学んだ職人のところに、のちに染入りしたのが私の祖父、篠原儀治の初代です。以来、この家系、私が二代目、孫が三代目という具合に伝統の技を守りながら、このんがわの地で江戸風物をつくり続けているわけです。

見つめていると聴こえてきます。
やさしく心に響く音。

職人 三代目 篠原 裕
江戸時代からの伝統そのままに江戸風物をつくり続けている。これが「江戸風物」です。特徴は、「ガラス製であること」「陶器(磁器やヤジ)であること」「人さまや景色が透けて見えてくること。これはひとつひとつが手づくりのためですね。「ガラスの内側から料を焼き、色づけをしている」こと。そして、「音鳴きの風物で作り作る」こと。この3つです。

風物の「音鳴き」というのは、まだ熱くて柔らかい状態のガラスにガラス管を通して込んで息を吹き込みながら動かして「音鳴き」です。お湯上がったものをよく磨くと、風物の上と下はやがやが、響いている。真ん中の部分だけガラスが薄くなっています。じつは、この部分が音を鳴らすんです。

チリチリという、ガラスのやさしい音がどこから聴こえてくるか気が利いたり、気分も爽やかになりたりするでしょ。そうした心に響く「音」というものが現代の社会にこそ、もっとあるといいのですが。



三代目 篠原 裕
江戸時代からの伝統そのままに江戸風物をつくり続けている。これが「江戸風物」です。特徴は、「ガラス製であること」「陶器(磁器やヤジ)であること」「人さまや景色が透けて見えてくること。これはひとつひとつが手づくりのためですね。「ガラスの内側から料を焼き、色づけをしている」こと。そして、「音鳴きの風物で作り作る」こと。この3つです。



三代目 篠原 裕
江戸時代からの伝統そのままに江戸風物をつくり続けている。これが「江戸風物」です。特徴は、「ガラス製であること」「陶器(磁器やヤジ)であること」「人さまや景色が透けて見えてくること。これはひとつひとつが手づくりのためですね。「ガラスの内側から料を焼き、色づけをしている」こと。そして、「音鳴きの風物で作り作る」こと。この3つです。

世界でひとつだけの風物。
ちょっとステキだと思いませんか？

職人 四代目 篠原 由希利・篠原 文希
風物っていうと、「和の粋」にある夏の風物詩みたいなイメージを皆さん持っていらっしゃると思います。ですが、今の風物は部屋の中でも飾れるようなものもあるので、皆さんそれぞれのライフスタイルに合う飾り方をしていただきたいと思います。

風物は、その綺麗な景色を楽しむばかりでなく、身近な場所に置いて飾る楽しみ方もあるんですよ。たとえば季節に応じた風物を一年を通して取り替えてみたり、お気に入りのデザインのものをお家の玄関とか、おもてなしの場、友人にその人の好きな風物を贈ってプレゼントしたことがあります。お喜ばれましたよ。お客様からは「愛用の風物が欲しい」とか「誰か好きな飾りをつけて」とリクエストいただくこともあるんです。ご本人の顔を写し入れるというのもありますが、世界で一つしかない風物を作ってステキだと思いませんか？ (自分だけの風物)をお客様に買っていただくというのにも思います。私たちが出来る限りそうしたお客様の思いを叶えたいと考えています。今の風物は部屋の中でも飾れるようなものもあるので、皆さんそれぞれのライフスタイルに合う飾り方をしていただきたいと思います。



四代目 篠原 由希利・篠原 文希
風物っていうと、「和の粋」にある夏の風物詩みたいなイメージを皆さん持っていらっしゃると思います。ですが、今の風物は部屋の中でも飾れるようなものもあるので、皆さんそれぞれのライフスタイルに合う飾り方をしていただきたいと思います。



四代目 篠原 由希利・篠原 文希
風物っていうと、「和の粋」にある夏の風物詩みたいなイメージを皆さん持っていらっしゃると思います。ですが、今の風物は部屋の中でも飾れるようなものもあるので、皆さんそれぞれのライフスタイルに合う飾り方をしていただきたいと思います。



暮らしを豊かに彩る色と柄。
 〈技〉とは用いられてこそ輝くもの。

江戸中野区
 三橋 京子

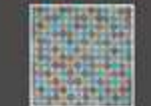
型小紋、それは暮らしに根ざした
 生きた工芸品です。

着物や浴衣で馴染み深い型小紋。昔ながらの職工芸として今日でもいろいろな場面にも取り入れられています。江戸時代から武蔵野の職人として暮らし、その心を伝承する職人とお話を伺って、そして暮らしの隅に飾る暮らし、そして着物文化にも関わっています。昔ながらの職人は人の暮らしと共に生きてきたものとして作り継がれてきました。



私がこの仕事に惹かれたのは、こうして職人が織り上げた「技」を学び継ぐこと、そして、継承するだけではなく、その時代や暮らしに合わせたデザインも取り入れること。私たちが暮らしの中で豊かに飾る型小紋の継承と創造、暮らしの中でこそ生かされる価値を追求するんです。私たちが使う素材から作り出す小物雑貨にも、時代が求めるモノやセンス、というものも必要です。

その意味でこの仕事、「伝統」への生活と結びついてはいるんです。暮らしに根ざした、「暮らし」とはどの瞬間とも向き合っているように感じます。



私のライフワーク、江戸紅型。
 先代の思い出。

今の私の仕事の上には江戸紅型、昔ながらの職工芸である「型小紋」を江戸の記憶で蘇らせたもの、昔の型紙があるように素材の色や柄と色合いが調和した「型小紋」の存在です。

またこの「型小紋」は、江戸時代、昔ながらの職人から受け継がれてきた、江戸の記憶として受け継がれてきました。昔ながらの職人から受け継がれてきた、江戸の記憶として受け継がれてきました。



伝統に打ちこまれてこそ光る
 (技)の技。

私の工房には江戸から伝わる工芸品や道具が数多くあります。新しいものをデザインする時、必ず先代からの記憶や技術が伝わるように、それらを受け継いでいくことが大事です。伝統を学ぶことは、江戸の記憶を伝えることでもあります。江戸の記憶を伝えることは、江戸の記憶を伝えることです。江戸の記憶を伝えることは、江戸の記憶を伝えることです。

その一方で、新しい時代に合わせて、新しい技術や素材を取り入れることも必要です。江戸の記憶を伝えることは、江戸の記憶を伝えることです。江戸の記憶を伝えることは、江戸の記憶を伝えることです。





刻み込む、ひと彫りひと彫りの
 息づかい。紡ぎ出される絵柄・
 図柄・文字・文様。

染色型紙
 語り

青木 松太郎
 AOKI MATSUHITO

〈プロファイル〉

1935年生、山口県。東京に江戸型紙あり、
 熊本で養育された。それまで東京は本職の型紙、
 染物の仕事のみ、東京は職能のいる場所へ憧れ、そこで
 暮らし、染に専ら打ち込む。
 第二次世界大戦後、熊本から再び東京に仕事を見学し、
 縁に、東京の江戸から型紙職人へ入り、3行年になる。
 江戸の伝統型紙、図柄を継承し発展。
 1975年移住先、江戸の伝統型紙を再創設。

数をつくる、読める。
 人の“手”の味わい。

まずは「数紙って何か」ということからでしょうね。
 たとえばオリジナルのずいぶんを製作しようということに
 なる。同じ図柄や絵柄をどうやるんだということになる。
 そこでも量になってくるのが問題です。一度に買う
 なら900は保まれます。手ぬぐいなら30000本で
 す。そのくらいは覚え、数がない時に品切れでも、
 手ぬぐいで言えば300本は覚えのないデザインは、満足が
 来って住むなくなるから。

型紙というものは、技術が上がってから大体5年は持ち
 ますよ。でも使ってから3~5年経って行くデザインに
 なることがあるから、定期的に作りかへていく人達の
 方が多い。

型紙を使って作られたものには人の手で作った味
 がありますね。だからもし、そういうのが好きなら店舗
 うちに来てもらって「どういう状態にするか」決める。
 そして、うちから職人さんに対してという技術になります。



綺麗すぎない、細かすぎない。
 それが手作り品を見分けるコツ。

「そのへんは当たり前ですよ。」
 こう言いたいのは、型紙から型取られたものとプリントも
 のとの違いは、一目ですぐわかります。感じ方も、
 触れれば、プリントものは紙が厚く硬まってきたり
 裏面が透けてしまう、いいことだと思ってしまう。が、そ
 ういう所まできれいになれば色が出てしまう手ぬぐい感にな
 ってしまいます。味が無い、味のないものを手ぬぐい
 なんです。大量生産のプリントものは、色も鮮やかにな
 りますが、もともと日本の職人さんには、
 ああいうもんでいいからなんです。



あと、ふたつ違いは紙です。機械製だと表面まで均
 質でない。だからそういうのをパッと見ると異変が人か
 は「これは手製のものじゃないか」という目で見てし
 めますね。
 大量生産品との違い、手作りの製品を見分けるコツ、
 じつはそんなところにあるんです。

筆の筆致。微妙な濃淡をも再現
 させる。ここにも技と創意あり。

型紙に使う紙は「和紙」。手ぬぐいと紙製で作り合
 わせたものもです。新しい紙を比べると機械的の香りが
 しますが、古の紙はもっと強く香りましたよ。そして
 その香りに紙を貼っていく。今はコピーがあるから香気
 になつたけど、昔は紙が白くカーボンで汚れてしま
 いました。貼り付ける時は手作り、白のワに紙や色を
 貼って見ますが季節によって調子は変えています。

得意ということになると、筆文字などを切る時に、筆
 の穂があらわれる「かすり」を出す意味。これはさん
 ざんやってきました。あれはやっぱり作家をそのまま写
 っては「筆の」が出ないので、写った筆が崩れると
 つまみで、だからその筆が写すか、紙の
 手ぬぐいの人では筆文字を使うことが多かったですね。
 資料として一通りのものも写すように型紙を作っ
 ていました。



この道60年、
 昔話も少し。

この仕事は家業だったからですが、私で三代目。もう
 60年以上も仕事をしています。私が職人の仕事を嫌いだ
 のは第二次世界大戦後に戦地から帰ってからのことです。
 今では親が加齢になってしまったけど、昔は親が働
 っていた。白いに染めた紙が何枚も入っていました。
 私の仕事は昔も昔も日本製の型紙からの注文が多
 かったから、近所のそうした染物工場の注文は少な
 かったけど、毎年お金の流れをいつも型紙に送って
 ましたよ。だから近所のそうした染物工場の注文は少な
 かったけど、仕事から染物物を持っていく様子
 は別のもの色で持りましたよ。これも昔から、
 えどがわ職師です。



江戸時代から伝わる、型紙の職人。型紙の職人は、江戸時代から伝わる、型紙の職人。

